

〔報告〕

乳幼児の母親と父親のソーシャルサポートと 子育て観の関係と育児休業利用の実態

片山 理恵¹, 内藤 直子¹, 佐々木 睦子²

¹香川大学医学部看護学科, ²サンフラワーマタニティクリニック

Relation between Social Supports given to Infants' Parents and mothers' Nursing-Related Feelings, and Situation of Parents' Utilization of Child-Care Leave

Rie Katayama¹, Naoko Naitoh¹, Mutsuko Sasaki²

¹School of Nursing, Faculty of Medicine, Kagawa University, ²Sunflower Maternity Clinic

要 旨

本研究の目的は、乳幼児をもつ母親と父親のソーシャルサポートと母親の子育て満足感、子育て負担感および母親と父親の育児休業の利用の調査である。方法は、無記名自記式質問紙調査とした。配付数は726名、回収数は246名（回収率33.9%）であり、分析対象は、インフォームドコンセントを得られた乳幼児をもつ母親159名、父親87名であった。質問紙構成は、基本属性、ソーシャルサポート尺度、子育て観尺度（CPS - M97）である。分析は、t検定とPearsonの積率相関係数を用い、統計解析ソフトはSPSS15.0J for Windowsを用いた。

結果として、子育て支援者は、母親は配偶者106名（66.7%）、父親は配偶者66名（75.9%）であった。ソーシャルサポート尺度の2群間比較では、母親 33.8 ± 6.1 、父親 34.3 ± 6.3 であり、有意差は認めなかった。ソーシャルサポート尺度と子育て観尺度の下位尺度の母親の子育て満足感・生きがい感には弱い正の相関、子育て負担感・不安感には弱い負の相関であった。育児休業の利用は、母親37名（23.3%）、父親2名（2.3%）であった。

結論として、母親の子育て観の肯定的感情を高めるには、ソーシャルサポートが必要であると考えられる。また、母親と父親ともに仕事と子育てが両立できる社会を期待しており、子育てへの意欲はあると考えられる。

キーワード：乳幼児の両親、ソーシャルサポート、母親、子育て観尺度（CPS - M97）、育児休業

Summary

The purpose of this research was to grasp the relation between social supports given to infants' parents and mothers' nursing-related feelings of satisfaction and burden and the situation of those parents' utilization of child-care leave. Conducted was an anonymous questionnaire survey of 159 mothers and 87 fathers after getting their informed consent. The results of the survey were analyzed by using the techniques of the t-test and Pearson product-moment correlation coefficient and a statistical analysis program, SPSS 15.0 for Windows. Of the 159 mothers, 106 (66.7%) were supported by their husbands. Of the 87 fathers, 66 (75.9%) were supported by their wives. There was observed no significant difference between the support given to the former, 33.8 ± 6.1 , and that given to the latter, 34.3 ± 6.3 . There were a weak positive correlation between the social support given to the mothers and their feelings of nursing-related satisfaction and fulfillment and a weak negative correlation between the support given to them and their feelings of nursing-related burden and anxiety. Utilized child-care leave were 37 mothers (23.3%) and 2 fathers (2.3%). It was suggested that social support was needed to raise mothers' nursing-related positive feelings, parents expected a society where work and child care were compatible with each other, and parents' child-care motivation was high.

Key words: Infants' Parents, Social support, Mothers, Childrearing Perspective Scale(CPS-M97), Childcare leave

連絡先：〒761-0793 香川県木田郡三木町池戸1750-1 香川大学医学部看護学科 片山 理恵

Reprint requests to : Rie Katayama, School of Nursing, Faculty of Medicine, Kagawa University, 1750-1 Ikenobe, Miki-cho, Kitagun, Kagawa, 761-0793, Japan

緒言

乳幼児を育てる時期は、女性や男性が妻と夫の役割に加えて子どもを育てる母親と父親の役割を獲得していく時期でもある。この時期の母親、父親は、子どもを大切に育てるためのよりよい子育て支援方法を望んでいる。

その中で母親へのソーシャルサポートは重要である。田中らは母親の疲労度軽減が子どもにあたることを軽減させる可能性や、夫の育児参加は特に母親の精神面の疲労度に関係し、専業主婦の疲労度軽減のソーシャルサポートには社会資源より人的サポートがより重要であると述べ¹⁾、丸らは乳幼児期の子どもをもつ母親の重要なソーシャルサポート提供者が夫であると再確認している²⁾。このように母親へのソーシャルサポートには、人的サポートが重要である。そして、山口らは産後1ヵ月の母親は実母からの手段的サポート満足度が高くなるほど育児に効果的の対処行動をとると述べ³⁾、橋本らは、手助けが欲しかった時期は妊娠中からあり、子どもの3~4ヵ月時点で手助けして欲しい内容は変化したと述べている⁴⁾。子育て時期別に母親のソーシャルサポートの重要他者に望む内容は変化している。一方、成瀬らは父親の育児支援行動促進の働きかけや政策検討には父親が仕事と家庭をどのように両立しその影響を本人が肯定的に捉えているか否かを考慮する必要性を⁵⁾、塩澤らは父親は母親に比べ性別役割に伝統主義的な者が多く、性別役割観が平等主義的な父親は育児家事実施意欲が高いと述べている⁶⁾。したがって、父親が子育てをどのように理解し男性として意識しているのかを把握することも子育て支援には必要になる。したがって、母親、父親のソーシャルサポートの調査は、先行研究でも実施されているが、子育てを取り巻く社会の状況は変化をしているため、母親、父親のソーシャルサポートの状況が変化をしているかいないかも含めて調査の必要性があると考えた。

また、育児期は子育てが日常生活を占める割合の高くなる時期でもある。そのため父親よりも子育てへ関わる機会の多い母親が感じている子育てへの思いについても把握する必要性があると考えた。大藪らは生後4ヵ月から10ヵ月の半年間に母親の育児満足感を中心とする意識構造は変化するとしている⁷⁾。さらに、就労者が子育てに十分に関わるためには育児休業は重要な制度であると考え、現在の育児休業の利用状況の把握も必要であると考えた。

目的

本研究の目的は、乳幼児をもつ母親と父親のソーシャルサポートと母親の子育て満足感、子育て負担感および母親と父親の育児休業の利用の実態調査とした。

方法

1. 調査対象

調査対象は、乳幼児をもつ母親、父親とした。調査協力施設は、B県内の保健センター、助産院、保育所であった。

2. 調査期間

調査期間は、2006年11月から12月であった。

3. 調査方法

調査方法は、無記名自己記入式質問紙調査を実施した。配付は、研究協力に同意の得られた母親および父親に配付をした。回収は、密封の個別郵送回収方式とした。

4. 調査内容

1) 基本属性

年齢、性別、世帯類型、子育ての支援者、子どもの人数、就業状態とした。

2) ソーシャルサポート尺度

堤らの「地域・住民用ソーシャルサポート尺度」を参考⁸⁾に、宮武が作成した夫のサポートの測定に用いた「ソーシャルサポート尺度」を使用した⁹⁾。4下位尺度、情緒的サポート4項目 ($\alpha = 0.92$)、手段的サポート4項目 ($\alpha = 0.91$)、情報のサポート4項目 ($\alpha = 0.90$)、評価的サポート2項目 ($\alpha = 0.92$) の計14項目構成である。評価は「そう思わない」から「非常に思う」の3段階、範囲は14点から42点の構成である。

3) 子育て観尺度

内藤らが1997年に開発し、乳幼児をもつ専業主婦の子育て観の測定に用いた、「子育て観尺度 (Childrearing Perspective Scale : CPS - M97)」を使用した^{10,11)}。2下位尺度、「子育て満足感・生きがい感尺度」6項目 ($\alpha = 0.85$)、「子育て負担感・不安感尺度」6項目 ($\alpha = 0.75$) の計12項目構成である。評価指標は「大変そう思う」から「ほとんど思わない」の5段階で、2下位尺度毎の合計得点を求め得点範囲は6点から30点である。

4) 育児休業制度の利用状況

育児休業制度の利用の有無について回答を求めた。利用者には、育児休業制度への希望に関する11項目、

表1 対象者の背景

属性	項目	母親 n = 159		父親 n = 87	
		Mean n	SD (%)	Mean n	SD (%)
年齢		31.6	3.7	33.5	4.2
世帯類型	核家族	139	(87.4)	78	(89.7)
	その他	20	(12.6)	9	(10.3)
子育ての支援者	配偶者	106	(66.7)	66	(75.9)
	実父	3	(1.9)	0	(0.0)
	実母	35	(22.0)	7	(8.0)
	義父	2	(1.3)	0	(0.0)
	義母	8	(5.0)	11	(12.6)
	その他	5	(3.1)	2	(2.3)
	無回答	0	(0.0)	1	(1.1)
子どもの人数	1人	92	(57.9)	55	(63.2)
	2人以上	66	(41.5)	30	(34.5)
	無回答	1	(0.6)	2	(2.3)
就業状態	就業者	68	(42.8)	86	(98.9)
	非就業者	86	(54.1)	1	(1.1)
	無回答	5	(3.1)	0	(0.0)

そして、利用しなかった者には、利用しなかった理由10項目を設定し、選択回答方式とした。質問項目の妥当性は、母性看護学研究者3名の間で慎重に内容を吟味し検討を重ね作成した。

5. 分析方法

対象の属性は記述統計、母親と父親のソーシャルサポートの比較および就業母親と専業主婦の比較は、いずれも正規分布していたので対応のないt検定、母親の子育て満足感・生きがい感、子育て負担感・不安感とソーシャルサポートの関係はいずれも正規分布していたのでPearsonの積率相関係数を用いた。なお、有意水準は、5%未満とした。統計処理は、SPSS 15.0 for Windowsを用いた。

6. 倫理的配慮

研究協力依頼書と調査票の文書を用いて口頭で、研究の趣旨や個人が特定されないことおよびデータは本研究以外では使用しないこと等を対象者に説明し、同意の得られた協力者に調査票と返信用封筒を渡した。回答後の調査票の郵送による返送を最終の同意とした。

7. 用語の定義

1) 子育て観は、内藤らが定義をしている母親の子育

ての認識のことであり、子育てから得られる肯定的感情(子育て満足感・生きがい感)と子育てから得られる否定的感情(子育て負担感・不安感)から構成されている^{10,11)}。

2) ソーシャルサポートは、人が自分のニーズを満たすために利用可能であると認識している社会的関係とされる¹²⁾。本研究では、対人関係のソーシャルサポートとした。

結果

1. 対象者の背景

質問紙配布726名中、回収数246名(回収率33.9%)で母親159名、父親87名であった(表1)。しかし、無回答が合計3名(母親1名、父親2名)であったため、本研究の分析対象は母親158名、父親85名とした。平均年齢は、母親 31.6 ± 3.7 歳、父親 33.5 ± 4.2 歳であった。世帯類型は、核家族が母親は139世帯(87.4%)、父親は78世帯(89.7%)であった。子育てを支援してくれる者は、母親は配偶者(父親)106名(66.7%)、父親は配偶者(母親)66名(75.9%)であった。就業形態は、就業母親68名(42.8%)、就業父親86名(98.9%)であった。

表2 母親と父親のソーシャルサポート比較

ソーシャルサポート	母親 n = 159		父親 n = 85		P 値
	Mean	SD	Mean	SD	
情緒的サポート (4項目)	9.6	2.0	9.4	2.1	0.633
手段的サポート (4項目)	10.1	1.9	10.4	1.8	0.197
情動的サポート (4項目)	9.4	2.3	9.9	2.1	0.075
評価的サポート (2項目)	4.8	1.2	4.6	1.3	0.295
総合計得点	33.8	6.1	34.3	6.3	0.518

対応のない t 検定

表3 就業母親と専業母親の子育て観 (CPS-M97) 比較

子育て観 (CPS-M97)	就業母親 n = 68		専業母親 n = 86		P 値
	Mean	SD	Mean	SD	
子育て満足感・生きがい感	26.6	3.8	26.9	2.7	0.556
子育て負担感・不安感	15.6	4.9	16.1	4.7	0.541

対応のない t 検定

表4 母親の子育て観 (CPS-M97) とソーシャルサポートの相関

子育て観 (CPS-M97)	母親 n = 158		就業母親 n = 68		専業母親 n = 86	
	γ	P 値	γ	P 値	γ	P 値
子育て満足感・生きがい感	0.255	0.001	0.254	0.037	0.184	0.093
子育て負担感・不安感	- 0.288	0.0001	- 0.230	0.059	- 0.272	0.012

Person 積率相関係数

表5 母親の第1 子育て休業制度の利用状況と子育て支援者

母親の子育て支援者	父親 n = 86		実母 n = 28		義母 n = 7		その他 n = 8		無回答 n = 1		計 n = 130	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
第1 子育て休業の利用												
利用した母親	25	67.6	8	21.6	2	5.4	2	5.4	0	0.0	37	100.0
使用しなかった母親	61	65.6	20	21.5	5	5.4	6	6.5	1	1.0	93	100.0

2. 乳幼児をもつ母親と父親のソーシャルサポート尺度の比較

ソーシャルサポートの平均値は、母親 33.8 ± 6.1 、父親 34.3 ± 6.3 で、有意差はなかった (表2)。また、14 項目については、母親 2.4 ± 0.4 、父親 2.5 ± 0.5 であった。

3. 乳幼児をもつ母親の子育て観 (CPS - M97)

母親の子育て満足感・生きがい感は 26.7 ± 3.3 、子育て負担感・不安感は 16.1 ± 4.8 であった。就業母親と専業母親の2 群間に有意差はなかった (表3)。

4. 乳幼児をもつ母親の子育て観尺度 (CPS - M97) とソーシャルサポート尺度との相関

母親の子育て満足感・生きがい感とソーシャルサポートについては弱い正の相関 ($r = 0.255$)、子育て負担感・不安感とソーシャルサポートについては弱

い負の相関 ($r = - 0.288$) が認められた (表4)。また、就業母親の子育て満足感・生きがい感とソーシャルサポートは弱い正の相関 ($r = 0.254$)、専業母親の子育て負担感・不安感とソーシャルサポートは弱い負の相関 ($r = - 0.272$) が認められた。

5. 育児休業制度の利用状況

育児休業制度の第1 子利用者は、母親 37 名 (23.3%)、父親 2 名 (2.3%) であった (表5)。

育児休業制度の利用母親における子育て支援者は、配偶者 25 名 (67.6%) であった。利用しなかった母親は、配偶者 61 名 (65.6%) であった。

6. 育児休業制度利用者の今後の育児休業制度への期待

育児休業制度利用者の今後の望み 11 項目中、母親

表6 育児休業制度利用者の望み

項 目	母親		父親	
	n = 44		n = 3	
	n	%	n	%
育児休業中の所得保障は、失業等給付の支給額と同じ賃金日額のおよそ50～80%の給付になるとよい	13	29.6	0	0.0
育児休業を取りやすい雰囲気の職場になるように、社会的な機運を盛りあげてほしい	10	22.7	1	33.3
育児休業が3年とれるとよい	8	18.2	1	33.3
子どもが3歳までは、育児休業が数ヶ月単位で分けてとることができるように	5	11.4	0	0.0
育児休業が1年とれるとよい	3	6.8	0	0.0
育児休業が2年とれるとよい	2	4.5	0	0.0
育児休業中は、代替要員の臨時職員の確保があるとよい	2	4.5	0	0.0
育児休業の利用期間が2ヶ月限定である場合は、現在、既に某市で行われている政策のように基本給の100%支給になるとよい	1	2.3	0	0.0
育児休業を取りやすい雰囲気の職場になるように国から職場へ奨励金を出してほしい	0	0.0	1	33.3
あなたのご両親が職業に就いている場合、そのご両親が孫の育児休業を1ヶ月間とれる制度があるとよい	0	0.0	0	0.0

表7 育児休業制度を利用しなかった者の理由

項 目	母親		父親	
	n = 100		n = 84	
	n	%	n	%
子育てと仕事の両立は難しいと考え仕事を辞めたので利用しなかった	41	41.0	1	1.2
育児休業制度がなかった	24	24.0	15	17.9
職場に育児休業制度の理解がなく、今までに利用した人もいなかった	6	6.0	5	6.0
育児休業制度を利用しなくても子育てと仕事の両立が可能であった	4	4.0	24	28.6
育児休業制度の利用しやすい雰囲気の職場でなく、社会的にも利用しやすい機運がなかったため、利用しなかった	4	4.0	11	13.1
育児休業中の所得保障である給与支給が満足な額ではないため、経済的問題が生じるので利用しなかった	1	1.0	8	9.5
代替要員の臨時職員の雇用がなかったため、利用しなかった	1	1.0	3	3.5
子育ては自分の役割ではないと考えているため、育児休業制度を利用しなかった	1	1.0	3	3.5
育児休業制度を利用すると昇進等への影響の懸念が考えられるため利用しなかった	0	0.0	2	2.4
その他	18	18.0	12	14.3

は、育児休業中の所得保障13名(29.6%)、育児休業を取得しやすい社会的な機運の盛りあがり10名(22.7%)の回答が高率であった(表6)。

(41.0%)であった。父親の理由は、育児休業制度を利用しなくても子育てと仕事の両立可能24名(24.0%)であった(表7)。

7. 育児休業制度を利用しなかった理由

育児休業制度を利用しなかった母親の理由は、子育てと仕事の両立は難しいと考え仕事を辞めた41名

考察

1. 乳幼児をもつ母親と父親のソーシャルサポートの実態

母親と父親のソーシャルサポートには有意差を認めなかった。これは、ソーシャルサポートの受けとり方が同様であることを示していると考えられる。

父親の平均値が母親より若干高かった。また、子育てで支援者は父親の配偶者（母親）認識率が母親による配偶者（父親）の認識率よりも高かった。これは、父親が母親を子育ての中心人物として子育てを遂行していると判断していると考えられる。子育てに努力している自分を理解してもらえることは、母親のこころの支えやこれからの活力にもなると考える。そして母親の配偶者認識率が父親より低値を示したのは、父親に子育て参加を望む気持ちの表れと言える。

したがって、父親も子育て参加の気持ちはあるが自身の考えで実施することが難しい社会状況が子育て参加減少の一要因と考えられる。佐々木らは就労母親はパートナーへ共働きにおける現在の協力を評価し、これからも一緒に子育てと仕事を遂行するために夫婦が対等に育児する認識を望んでいたと述べている¹³⁾。今後は、一緒に子どもを育てていると感ずることが出来る母親と父親の子育て力を発揮できる社会環境が求められていると考える。

子どもと関われる時は可能な限り触れ合いたいという願いも含まれていると思われる。母親と父親と子どもとの触れ合いは、お互いを認める機会も増え3者の関係性へも良好に作用し子育てへ肯定的に影響することにもなると考えられる。

本研究の母親のソーシャルサポート平均値が、宮武のNICU退院後の児を育てていた母親の夫のソーシャルサポート平均値 $27.68 \pm 9.60^{9)}$ より高い値であったのは、正常経過の児を育てていたため、父親が一般的に考えられるサポートを行うことで、父親からソーシャルサポートを受けていると認識できる状況であったためと考えられる。

次に、母親の重要他者からのソーシャルサポート項目別平均値順位は、「手段的サポート」、「情緒的サポート」、「評価的サポート」、「情動的サポート」であった。中山らの1歳6ヵ月健診の母親では、育児共同感（母親の父親と育児を一緒に行っているという気持ち）の影響因子に父親の「直接育児行動」、「情緒支援行動」が重要としている¹⁴⁾。本対象は、項目別結果より育児共同感を感じる構成要素を持ち合わせている可能性が考えられた。また、川上らが父親役割意識向上要因に「子どもとの関わりが増える」を報告している¹⁵⁾。

したがって、父親が「手段的サポート」として行動で子育て参加を示すことは、父親から母親への子育てサポートに留まらず、自身の父親役割意識を高める自己成長へつながらずと考える。

2. 乳幼児をもつ母親の子育て観

母親の子育て満足感・生きがい感は 26.7 ± 3.3 、子育て負担感・不安感は 16.1 ± 4.8 であった。就業母親と専業母親の2群間では、子育て満足感・生きがい感、子育て負担感・不安感ともに有意差はなかった。このことから、就業母親も専業母親も子育てに対する感じ方は同様であると考えられる。

本研究と同地域で調査を実施した内藤らの先行研究では、乳幼児を持つ専業母親の子育て満足感・生きがい感 25.96 ± 3.34 、子育て負担感・不安感 $17.04 \pm 4.72^{11)}$ と報告されている。本研究では、専業母親の子育て満足感・生きがい感 26.9 ± 2.7 、子育て負担感・不安感 16.1 ± 4.7 であり、ほぼ同様の結果であった。先行研究からおおよそ2年経過後の専業母親の子育て観は、ほとんど変化していない現状であったことが明らかとなった。現在、次世代育成支援対策推進法に基づき都道府県別に行動計画が策定され、次世代育成支援と関連が深い健やか親子21も期間延長し、少しでも子育て環境が改善するよう様々な支援が実行されている。しかし、本調査の専業母親の子育て観尺度からは、母親の子育てへの感情に変化をみるまでには至っていない社会の子育て環境が考えられる。

3. 乳幼児をもつ母親の子育て観とソーシャルサポートの相関

ソーシャルサポートと母親の子育て観の関係では、ソーシャルサポートは子育て満足感・生きがい感と弱い正の相関、子育て負担感・不安感と弱い負の相関を示した。これは、重要他者から支えてもらっていると感じとれるときに子育てに前向きになれることを表わしていると考えられる。荒牧は夫からのサポートは育児負担感と負の相関、肯定感と正の相関関係を報告しており¹⁶⁾、藤井らは人的サポートを得られる人ほど子育てに満足していると述べ¹⁷⁾、武市らは母親の育児困難の度合いと父親の育児協力不足との関連を示唆している¹⁸⁾。子育てに肯定的感情を抱けるには、人から支えてもらう人と人とのつながりも必要であることが、本研究においても同様の結果を得た。したがって、子育てに関して人々が気軽に交流できる社会のしくみは今後も必要であり、継続されると考える。

4. 乳幼児をもつ母親と父親の育児休業利用の現状

育児休業の利用（第1子）は低率であり、父親が母

親と比べ顕著に低率であったのは、父親の育児休業取得が一般的でないことを示していると考ええる。日本の育児休業取得率（平成20年度）は、女性90.6%、男性1.23%であった。前年度に比べ、女性0.9%上昇、男性0.33%低下し、父親の育児休業取得は難しい¹⁹⁾。本研究の対象である父親が育児休業を利用しなかった理由に「育児休業制度を利用しやすい雰囲気や社会的機運がなく利用しなかった。」が上位回答であった。子育てに関わる意識はあるが、子育てをしようとする社会環境に阻まれ結局は子育て不参加の現状が考えられる。このような状況の改善として、育児・介護休業法が一部改正（平成22年6月より施行）され、パパ・ママ育休プラスが盛り込まれ、父親の育児休業取得を促進し父親と子どもが一緒に過ごせる環境をめざしている¹⁹⁾。法改正が、即、育児休業取得率上昇へ効果を示すことにつながるには難しい現状があると考えられる。また、母親の利用しなかった理由第1位は「子育てと仕事の両立は難しいと考え仕事を辞めた」であった。子育て環境を整える要因として育児休業の活用がされていない現状があった。今後は、母親、父親関係なく、育児休業の活用も含めて、協力して子育てが行える社会環境の変化が求められていると考えられる。

研究の限界と今後の課題

調査地域が限局されているため、結果を一般化することが難しい。育児・介護休業法の改正後は、育児休業取得率やソーシャルサポート、子育て観への影響も考えられる。今後も母親の子育て観に影響する要因の検討を重ねていくことが必要であると考ええる。

結論

乳幼児をもつ母親と父親に、ソーシャルサポート、子育て観、育児休業制度の利用状況の実態調査をした。母親と父親のソーシャルサポートには有意差を認めなかった。ソーシャルサポートと母親の子育て観の相関では、ソーシャルサポートは子育て満足感・生きがい感と弱い正の相関、子育て負担感・不安感と弱い負の相関を示した。母親の子育て観の肯定的感情向上には、ソーシャルサポートの必要性が考えられる。

謝辞

本研究にご協力頂きました皆様に心より感謝いたします。

文献

- 1) 田中満由美, 倉岡千恵: 乳幼児を抱える専業主婦の疲労度に関する研究—ストレス・育児行動・ソーシャルサポートに焦点をあてて—, 母性衛生, 44 (2), 281-288, 2003.
- 2) 丸光恵, 兼松百合子, 奈良間美保, 他: 乳幼児期の子どもをもつ母親へのソーシャルサポートの特徴, 小児保健研究, 60 (6), 787-794, 2001.
- 3) 山口咲奈枝, 遠藤由美子, 小林尚美, 他: 産後1ヵ月の母親の育児に対する対処行動の実態および対処行動と育児不安, ソーシャルサポートの関係, 母性衛生, 50 (1), 141-147, 2009.
- 4) 橋本廣子, 宮田延子, 下井勝子, 他: 3歳児健診から見た育児不安と育児支援～不安の時期と育児支援から～, 岐阜医療科学大学紀要, 2, 33-38, 2008.
- 5) 成瀬昂, 有本梓, 渡井いずみ, 他: 父親の育児支援行動に関連する要因の分析, 日本公衆衛生雑誌, 56 (6), 402-410, 2009.
- 6) 塩澤真由美, 石田貞代, 荻原結花: 出産早期における父親の育児家事实施意欲に関する研究—母親の期待・性役割態度・出産準備教育との関連—, 母性衛生, 47 (4), 582-589, 2007.
- 7) 大藪泰, 前田忠彦: 乳児をもつ母親の育児満足感の形成要因 I—4ヵ月児と10ヵ月児の母親の比較—, 小児保健研究, 53 (6), 826-834, 1994.
- 8) 堤明純, 堤要, 折口秀樹, 他: 地域住民を対象とした認知的社会的支援尺度の開発, 日本公衆衛生雑誌, 41 (10), 965-974, 1994.
- 9) 宮武典子: NICUに入院していた児を育てている母親の夫のサポート・ピアサポートと育児不安および対処方略の関連, 日本看護研究学会雑誌, 30 (2), 97-108, 2007.
- 10) 内藤直子, 橋本有理子, 杉下知子: 0～3歳の乳幼児を持つ〈専業主婦〉の子育て観尺度開発に関する研究 CPS-M97 の妥当性・信頼性の検証, 日本看護科学学会誌, 18 (3), 1-9, 1998.
- 11) 内藤直子, 橋本有理子, 白井瑞子他: 男女共同の0～3歳児子育ての社会化と子育て観評価指標及び類型別子育て支援法の研究, 平成15年度～16年度基盤研究成果報告書, 2005.
- 12) 北村俊則: 周産期メンタルヘルスケアの理論 (第1版), 65-66, 医学書院, 2007.
- 13) 佐々木睦子, 内藤直子, 片山理恵: 0～3歳児を持つ専業主婦と就労母親のパートナーへ望む内容, 日本母性看護学会誌, 9 (1), 37-45, 2009.

- 14) 中山美由紀, 三枝愛: 1歳6カ月をもち母親に対する父親の育児支援行動, 母性衛生, 44 (4), 512-519, 2003.
- 15) 川上あずさ, 牛尾禮子: 父親の育児に対する役割意識に関する要因とその支援方略, 小児保健研究, 67 (3), 496-503, 2008.
- 16) 荒牧美佐子: 育児への否定的・肯定的感情とソーシャル・サポートとの関連—ひとり親・ふたり親の比較から—, 小児保健研究, 64 (6), 737-744, 2005.
- 17) 藤井加那子, 永井利三郎: 育児にある母親の育児満足感に影響する因子—子育て不安の認識の有無による違い—, 小児保健研究, 67 (1), 10-17, 2008.
- 18) 武市知己, 小野美樹, 小倉英郎, 他: 少子化対策に求められるものは何か?—育児協力や母親の就労状況, 育児困難についての質問紙調査—, 小児保健研究, 64 (4), 542-551, 2005.
- 19) 厚生労働省.: 育児・介護休業法の改正について, <http://www.mhlw.go.jp/english/policy/affairs/dl/06.pdf>, 2011/12/1.